

石垣が語る風土と文化－屋敷囲いとしての石垣

漆原和子 著, 古今書院 発行,

2008年3月, 257pp. 定価 3,600円

本書は、石垣を通して見た東アジアの風土論である。読み進めると、石垣と風土を結びつける地理学的視野の深さを感じる。多様な様式をもつ石垣のなかでも、本書は「屋敷囲いとしての石垣」に注目している。いわゆる「城郭の石垣」ではなく、共著者が「風土と生活に密着した文化」と言い換えている屋敷囲いを取り上げており、特に気候や気象に興味を持つ読者であれば本書の内容全般に惹かれる点が多いはずである。なぜなら、季節風や頻繁に通る台風などの強風・寒風から家を守ることが「屋敷囲いとしての石垣」の主な役割だからである。

全体が13の章で構成されている。概略は次の通りである。第1章は総論となっており、石垣を築く文化と、文化領域あるいは文化圏との関係について述べている。この分部は本書を読み進める際の基盤にあたる。これに続いて「屋敷囲いとしての石垣」の役割を述べている。第2章と第3章は、主要な調査対象地域である喜界島について議論している。この二つの章から、議論に不可欠な要素が見えてくる。すなわち、屋敷囲いの素材および伝統技術、必要性（強風の事例としての台風の特徴）、集落の風土と文化、家屋の配置（沿岸地域の地形との関係）、がそれらである。第2章での喜界島の地勢から始まり季節風と台風による強風の風配図や地形断面と石垣分布に至る解説は、本書のなかでも最も興味有る部分のひとつである。石垣の形態について現地調査の結果を図示すると同時に、石垣の効果に関しては高さとも母屋の軒の高さとの関係を述べている。第3章では、石垣の形態的な特徴や地形に対する立地配置に関する情報を総合して、「石垣を作る文化」を議論している。

第4章から第12章は、さまざまな調査対象地域での研究結果に基づいた議論を行っている。具体的には、渡名喜島、九州南部、対馬、四国宇和海沿岸、高知県宿毛市沖の島、室戸岬、紀伊半島、中華民国の台湾海峡南部の澎湖列島および金門島、韓国の済州島を取り上げている。これらの地域を地図上に並べると、一つの海洋国家とも言うべき領域がイメージされる。従来の民俗学的な研究では、例えば琉球文化圏と大和文化圏の地理的な広がりなどが明らかになっているが、「屋敷囲いとしての石垣」を通して見えてくる文化圏とは異質な概念を重ね合わせることで、これまでにない新しい視座を提案しており、これは本書の狙いの一つと考えられる。

第13章は、まとめの章である。広範な調査地域について、石垣の高さと海岸からの距離の関係に注目し、それを基にして総括を述べている。それによると、どの地域でも海岸からの距離が長くなると石垣の高さが低くなる。同時に地域によりその関係は固有であり、喜界島では他の地域と比較して距離とともに急に低くなる特徴がある。これらの実態に対して興味ある解釈が与えられている。すなわち、屋敷囲いの石垣には風力を弱める役割だけでは考えられない要素が存在するのだが、この点については読者が本書を読み進む中で発見していただければよいだろう。

本書には写真や図画多く利用され、理解のよい手助けとなっている。美しい石組みの写真やスケッチなどは、多くの読者の興味を引き付けるに違いない。広範囲の方にお勧めしたい一冊である。

(林 陽生：筑波大学生命環境科学研究科)